

かくう

架空の境界

きょうかい

hallucination

The author

春風楽

Illustration

たちまよしかづ

ハレツチアメ



ふちはら文庫

第一章

【踏み入れた幻覚の世界】

時刻は夜の七時を過ぎたところ。

みずきは、目的のシティホテルの前に来ると、わずかな逡巡のちに、中に踏み込んでいった。

カードを見せて受付をパスし、エレベーターで四階へ上がり、廊下を歩いて目的の部屋の前へ立った。

引き返すなら、今かも知れない。

一度足を踏み入れてしまったら、もう二度と元の日常に戻れないかもしれない。嫌な予感がしたのは確かだ。

しかし、ひさしにこれ以上、淫行を続けてほしくはない――。

みずきは、ドアの前で小さく息を吐いて心を落ち着けると、カードを通してロックを解除し、室内に入った。

室内には、ひさしの姿。

そして、その先には――信じられない光景が広がっていた。

「やあ、よく来たね。時間になっても現れないから、逃げたのかと思ったよ」

「……。に、逃げたりなんかしません……」

そう強がるものの、目の前の衝撃的な光景に、足元が揺らいでいた。

薄暗い部屋で、全裸の女子生徒たちが不気味に身体をくねらせているのだ。

そこには男性の姿がないにもかかわらず、あたかも挿入されて、フェラチオをさせられているかのような動きをしている。

まるで、複数の透明人間に犯されているかのような異様な光景なのだ。

「どういことですか？ まさか、クスリ……？」

「まさか。そんなわけないだろう」

ひさしは嘘をついていない。これは、ひさしの持つ『幻覚』を操る力によるものなのだ。生まれつき、この力を持っている。ひどく現実離れた話なのだが、事実なのだから仕方ない。

その間も、女子生徒たちは恍惚の表情で身体をくねらせている。

みずきは、ただ立ち尽くしてその異常な光景を見ていることしかできなかった。

予想では、乱交パーティをやっていると思ったのに、そこには男の姿がない。ひさしは、上着すら脱いでいなかった。



「言ったとおりだろう？ 俺は手を出さないし、触れてもいない。お互い絡むことも交わることもなく、こうやって楽しんでるんだ」

「あつ、あああーっ……ああんー！」

目の前で、女子生徒がひとり、肌身を痙攣させて絶頂を迎えた。

虚ろな瞳で、口からは唾液を垂らし、膣内からは大量の愛液を溢れ出させている。

その横の女子生徒も、激しく喘ぎながら、達してしまっているのだ。

みずきのことなど見向きもせずに、誰もが快楽の虜になっているのだ。

「……や、やめさせてくださいっ！ こんなおかしいこと……」

この異常な状況に到底納得できず、彼女はひさしのもとに詰め寄った。

しかし、そんなことは予想通りだ。

もうこの部屋に踏み込んだときから、彼女の運命は決まっていたといっても過言ではない。

「大丈夫、手品みたいなモノさ。君も体験してみればわかるよ……」
視線をみずきの瞳に合わせて、幻覚の世界へ誘ってゆく。毎晩のように女子生徒相手に
培った能力は、日々強まっていた。

無防備なみずきに、この力を回避する術などない。

「さあ、はじめようか……」

みさしの声とともに、みずきの視界が急速に幻覚に覆われてゆく。

視覚のみならず、触覚も、聴覚も、嗅覚も、味覚すらも、いともたやすくコントロール
されていってしまうのだ。

「ううっ……く……なんですか、これ……」

気がつけば、触手に四肢を取り込まれ、完全に身動きができなくなっていた。

身体を締め付ける気味の悪い感触に、寒気が走る。

「触手に唾えこまれる気分はどうだ？」

みさしは、みずきの正面に悠然と立ちながら、彼女の姿態を眺めていた。その表情には
特に興奮もない。

そう語りかけられる間も、触手は嫌な水音を立てながら蠢いている。



異様な感触に包まれて、みずきの表情は歪んでいた。

「ううつ、気持ち悪いです……や、やめてください……」

「やめる？ 何を？」

瞳を潤ませる彼女に構うことなく、ひさはしは幻覚の触手をコントロールしていった。

「ひ、ああああっ！ いやあつ……」

さつきまで強気だった彼女も、粘液にまみれた触手が顎から唇へ向けてせり上がってくる感覚に、悲鳴を上げてしまう。

それだけではない。その一方で、細く尖ったしなやかな触手が、彼女の尻肉や秘部にも這ってきたのだ。

触手の動きは実に精妙だ。

複数に分かれた先端部分がアヌスの縁から、皺のひとつひとつつまでも、遠慮なく揉みほぐしてゆく。

身体中に侵食してくる触手に、恐怖で歯の根が震え出す。

唇周辺にすり寄っていた触手は、わずかに開かれた彼女の口へ潜り込んできた。

「ン、んぐうつ、うつ！ ふううつつ！」

唇を強引に開き、閉じようとした歯を無理やり押し戻し、喉奥へと入り込んでくる。
(こ、怖い、苦しい……息が詰まって、顎まで外れちゃいそう……)

まさか、この会合で行われているのが、ここまで異常なことだとは思わなかった。それなのに、先ほど見た女子生徒たちは一様に快楽に溺れていたのだ。

(そんな……気持ち悪い触手に、こんなことされて……！)

——それで感じてしまうだなんて、おかしい。みずきがそう考えている間も、触手は彼女の柔肌を蹂躪し、口腔のみならず、秘肉も、腕や腋の下までをも舐めしゃぶっていた。

(ううつ、気持ち悪い……腕も肩も、腋の下まで……あ、ああつ、お尻も舐められて……ああうつ……)

全身をしつかりと拘束されてしまっているの、身をよじることすら自由にならない。

強くうねり、吸い付く触手に、ますます四肢が取り込まれてゆく。それとともに、新たな粘



液を吐き出して、更に身体に纏わりついてくるのだ。

「うぶっ、う……んううっ……！」

必死にもがいて、口だけでも自由にしようとするも、それも無駄なこと。

喉奥まで詰まった触手は、言葉を発することなど許してはくれないのだ。

そんな彼女に、禁断の快楽を与えてやろうと、触手は女陰を掻き混ぜ始める。

「んぐっ！ ううっ、んふうううっ……！」

もう何十人もの女を快楽の底に引きずり込んできた触手は、女たちのどこが弱いのかを熟知している。

最も快楽を発生させる部位だけを正確に狙って、繊毛のように細い舌で舐めしやぶってくるのだ。

（ああ、身体が熱い……身体が痺れて……ああ、お願い、早く終わって……）

意識が飛びそうになるも、そのたびに触手に鋭い刺激を与えられて、失神することも出来ない。

「んっ、む……ふううっ！ んぐっ……う……」

焦点の合わない瞳で、宙空を見つめ、祈るような気持ちで耐え続けるみずき。

もう自分の力ではどうにもならない。ならば、彼女に残されたことは、早く終わってくれることを願うだけだった。

「そうだな……一旦、やめてやろうか。ここで壊れられても迷惑だからな」

ひさしは、幻覚を操って、触手の拘束を少し緩めてやった。

喉奥に入っていた触手を引き抜き、満足な呼吸をさせてやることにする。だが、その他の拘束は解かない。

「う、うう、はふううっ…………。あの……やめたんじゃないんですか？」

「一時休止だ。何が不満だ？」

「先生、これ……放してくれないんですか？ 自由には、してくれないんですか……」

瞳の光は弱っているものの、正気は失っていないらしい。

ひさしの顔色を覗いながら、おそろおそろ尋ねてくる。その表情には、明らかな恐怖が張り付いている。

「……決めるのは俺だ。お前はただ、耐えていればいいんだ」

廊下で話したときの剣幕が、嘘のようだった。そこには、触手に怯える普通の少女がいるだけだ。

無理もない。それだけこの触手幻覚が、想像を遥かに超えたものだったのだろう。

再び、触手を動かして、彼女の四肢を責め始める。吸盤のようなそれは、彼女の柔肌を強力に舐めしやぶり、吸い上げてゆく。

「くっ、うううっ……苦し……あぁっ……！」

「そのうち慣れる。そうすれば楽しめるはずだ」
肉穴にすっかり飲み込まれた手足が、激しく吸われる。食いちぎられそうなほどの締め付けを受けて、彼女は瞳を潤ませた。

「さて、次はそうだな……。胸を責めてやろうか」

「う、うっ……気持ち悪い……」

新たに追加され、目の前に迫る触手に表情を強張らせて、喉を震わせる。

幻覚に取り込まれた身には逃げ場などない。

彼女は、触手に絡みつかる自分の身体を、現実感のない瞳で見下ろしていた。

「ううっ、痛い……あまり、締め付けないでください……」

肌身を蠢く触手の違和感に眉を寄せるばかりで、快楽を感じている様子はない。

最初は、どの女子生徒もそうだ。

だが、会合の時間が終わる頃にはすっかり触手の虜になっているのが常だった。まだまだ、調教は始まったばかり。焦る必要はない。

それに、こうして初々しい反応を見せてくれる最初のほうが、よいとも言える。

慣れきって淫らになりきってしまった女はかえって、面白くないものだ。抵抗する姿こそが、嗜虐心を高めてくれる。

にやりと笑いながら、ひさはは肉棒に酷似した触手を新たに幻視させた。

「ヒッ！ なっ、何ですか、これ……？」
「見ればわかるだろう。これが女性器なわけないだろ？」

近づく肉棒型の触手の先端を見つめて、頬を引きつらせる。生娘ならではの反応に、興奮は高まるばかりだ。

ひさしの神経と連動している触手は、興奮を露に彼女の顔に近づいてゆく。

「い、いやっ……ヌメヌメして、気持ち悪い……」

幾つもの触手が、乳房に絡みついてゆく。一際大きい肉棒型の触手を、両胸の谷間にパイザリさせるように挟み込ませる。

ひさはは触手で強引に乳房をたぐり寄せた。

ぬめっているが、その硬さは縄そのものだ。鋭い痛みに、彼女は小さく悲鳴を上げた。

「あ、あうっ！ いた……痛いっ！ ムネ、苦



ぶちばら文庫

架空の境界

2011年 9月30日 初版第1刷 発行

■著 者 春風栞
■イラスト たぢまよしかづ
ハレノチアメ (表紙)
■原 作 クレージュ

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIORI HARUKAZE ©ぞふとさ〜くるクレージュ

Printed in Japan 2011

PP026

Temptation 2

ぶちばら文庫02
春風菜 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円(税込)



保健室の天使を救うには、
性感を操るしかない...

この催淫治療で!



好評発売中

ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。